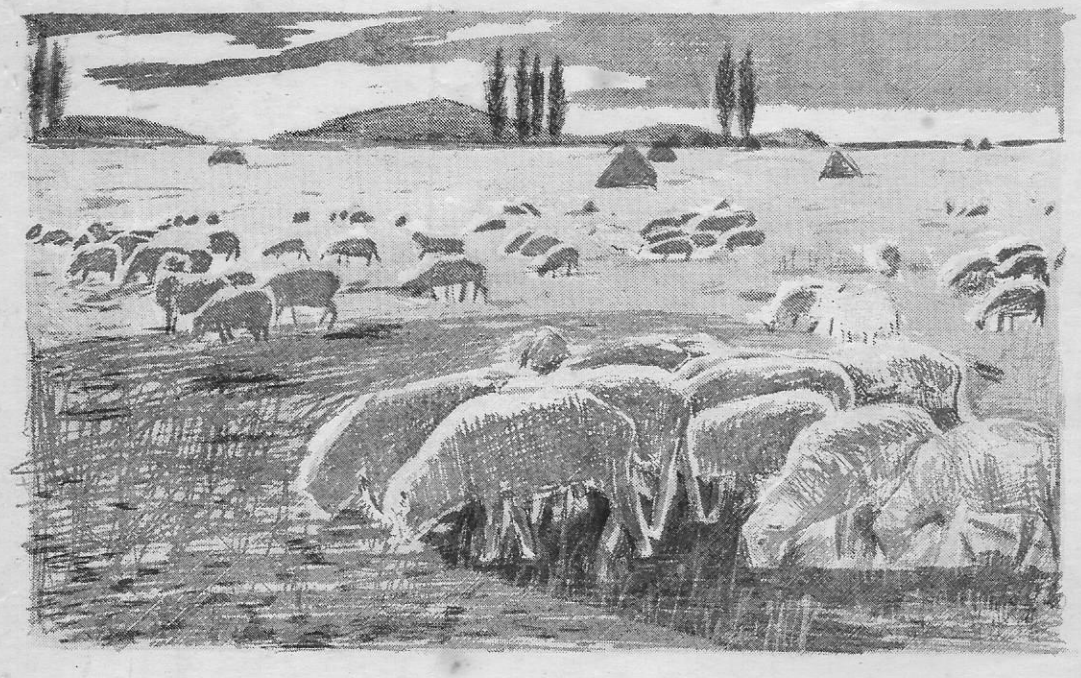
LEON-TODO

N-ro 12



JUNIO

1955

HEL-HOSIDA

瑞典の国際児童画展と小樽からの援助

早川　昇

小樽エスペラント協会が、昨年秋、瑞典で開かれた国際児童画展へ　50枚に近い小樽や他地の小学児童画をお送りして、私の育った小樽花園小学校から、一等三名、二等二名の受賞者を出した事は、今思い返して見ても、小樽の我れ我れ、殊に私にとり、母校の栄誉として、限りなく喜ばしく思う。

此の送画に当つて、学童の為快く全額の費用を御負担に成った協会長山賀博士のお心は、私達の頭を清め、胸を拡げるものであつたと、私などは信じて居る。

此の画展への出品の依頼が、瑞典カールスエーガの「ラ・アーグロ」エスペラント小会委員、グンヒルド・ディスタンド夫人から私へなされたのは、昨年の六月で有つた、と記憶する。同小会が、同国のジャーナリスト、故アイナー・アダムソン氏から私の事を承知されて、二ケ年にもわたつて、私の為、世界エスペラント協会費をお支払い下さつた事は、予てから私の、終生忘れ得ないと信じて居たところだったので、私は及ばずながらお礼のおしるしにもと、早速、道教委、市教委、日本エスペラント学会其の他への斡旋依頼に取りかゝった。市教委では、指導主事の三好学氏が、小学校長会議開催の節に、参会者一同に其の旨を達するとお約し下すつたので、非常にうれしく有難かつた。日本エスペラント学会では、どう御援助下さつたか具体的なことは判らないが、奈良県に住まれる藤井徹男氏と言うお方も、彼方へ学童の図画十枚程を送られたと後で知って、学会のお世話によってゞはないかと、感謝して居る。市内の小学校へは、市教委の御好意も有る事なので、私自身の直接の依頼は、日常の通路に近い三校にとどめた。其の内、汐見台小学校（図画担当、坪谷先生）、花園小学校（同、中島先生）の御快諾を得た事は、どんなに私を喜ばせたか。こうして七月には、右二校から、合計四十枚の傑作児童画が、私の手に渡った。是れに、札幌市幌北小学校の女生の絵や、当協会員斉藤翠氏のお集めだった鳥取県倉吉町明倫小学校生の絵を加えて、タイトルのエス訳と附箋への記入に取りかゝった。タイトルのエス訳には、当協会の先輩、江口音吉氏の御援助を一日頂戴出来て、仕合わせだったと思って居る。

絵の荷造り、発送には、市内港町の日藤商店の高橋巌氏（常務取締役）が御親切にお世話下すつた。其の折、私から、瑞典に於けるエスペラント運動に就いて聴かれた同氏は、氏自身も昔ではエスペラントを学ばれた事を話されて、国際児童画展開催の為御努力のテイスタッド夫人とやらへ、私からも、当店で売り捌いて居る王様印絵画用品見本一揃えを、お送りしましようと申出られた。そして間もなく、見本の一箱も、私の名宛書きに依つて、海ならぬ道を、北欧へ飛いだのだつた。是れに対する同夫人の謝辞と、あちらでの日本児童画の評判を、高橋巌氏宛のお手紙から拾つて見よう。

「早川さんからのお手紙と殆んど同時に、貴方のお送り下さつたクレヨンの小包も、届きました。私達は、本当に、うれしいやら有難いやらです。そしてもう、当地の美術審査員の二名が、用い初めました。私の二人の坊やも同様、其れを使つて、画き初めました。会長は今、他地の講習会へ行つておいでになりますが、同氏は貴方のお送りになられたクレヨンを宣伝しようという御意向で居られまして、きつと近い内には、注文をお受取りになつて、お送りになる事でしよう。私の坊や達も学校で皆に、頂戴した色々な品を見せて居まして、既に何名もが、趣味を持ち初めました。世界児童画展覧会は、当地で総ての人々に感られたと言つて宜敷いのですが、中でも日本から参りました絵は、大層喝賞されました。」

同夫人から私へのお手紙によると、日本からの児童画の出来栄えは、審査員を全く驚かせたと言う。

此の展覧会は、カールスコーガでは、昨年九月四日から十二日にわたつて開催された。其の会場風景は、「ラ・プラクティーコ」誌昨年十二月号に載つて居るが、其処は美術館で、数多くの児童の北欧の数笑が、各国からの児童画の間を、あたためて居る。此処に集まつた世界の児童画は、十八ケ国からと言い（前掲誌）、又、二十ケ国（万国エスペラント協会誌、昨年十一月号）からとも言う。観衆は、右期間に於いて、六千六百九十三人を算えた由である。

カールスコーガに於ける展覧が終ると、同展は次に、瑞典国内の多数都市を巡回して、開かれたようである。前掲協会誌によると、昨年十月に於いては既でに、十三市から開催を求められて居り、今後少くとも、四万人内至五万人の観衆を迎える事に成ろうと言う。会長ボナンダー氏等の御満足は固より、小いさなエスペランチスト達の歓喜は、どんなだつたろうか。

日藤商店へは、昨年十一月、テイスタッド夫人から七十五瑞典クローネの送金が有つて、王様王冠クレヨン二十五色のもの五箱と、王様水彩絵具十二

色のもの二箱と、王様王冠クレヨン別種二十五色のものを送つてくれと申し越された。夫人の御希望では、クリスマス前に受取りたい、プレゼントにするからとの事だつたので、高橋氏は犠牲的に、是れも航空便を以て、発送された。私は是れに対し、一寸お気の毒な気持もしたのだつたが、其処に、目前の小利をお考えにならぬ同氏のお快さそうなお顔を見て、もう何も忘れて、瑞典の良い子達の喜びを、我が胸に写すのだつた。

テイ夫人から、小樽北園小学校生五名の入賞を報じて来たのは、十二月十一日の事だつた。受賞者の姓名、年令、画題は

○一　等

渡辺つぐじ君（7才）―「花火大会」。

横口宏子さん（8才）―「お祭神輿」。

北浜靖子さん（9才）―「私のお友達」。

○二　等

糸崎ひで子さん（7才）―「鯉幟り」。

山崎寿美子さん（8才）―「節分」。

そして賞品は、一等にはボウルゼン画伯（S-ro Elizabeth Bergstrand Poulsen）の色刷児童画集―"Nordiska Barn"―と、「ラ、アーグロ」小会版の"Karlskoga Urbo Fariganta"の二冊で、二等には後者一冊と報じて来、間もなく其れ等の品は、小樽を含む各地出品児童に対する画展参加証書と共に、私の軽机に届いた。

そこで私は、此の旨を山賀博士に報じると、再び三好指導主事を訪ねて、当市小学生分賞品、証書の授与式の挙行を依頼した。

こうして、本年一月十九日の午後の事だつたが、山賀博士のお立会いの下に、私等も出席して、小金沢教育長から、栄えある賞品、証書は授与された。教育長室を充たした五人の受賞者と、証書受取人代表の生徒の歓びに溢れた表情は、永く私の脳裡に生命(いのち)あるで有ろう。生徒さん達に付いておいでになつた両先生も、流石に、心からおうれしそうで有つた。其れ等先生方は、お言葉によれば、多分、当協会本春の講習会に、欣然御参加に成る事で有ろう。世界を回らす教育者エスペランチストの同志愛が、遠からず此の本道にもたらさんとするものの前へ、私は、低く頭を垂れる。

私達の送画に際しての気持からせば、瑞典での展覧が終つたならば、全資料を此方へ送り寄越してもらつて、北海道でも盛大に「世界児童画展」を開きたかつたのでは有るが、同小会では、カールスコーガに「エスペラント館」"Esperanto-Domo"を建設する為、全応募収品は、希望者へ、売り渡し

たようである。テイ夫人の義せに依ると、彼女も、二枚、

「お友達」―― 常磐野ゆきお君（汐見台校生、七才）画、

「鍛冶屋」―― 柏村忠昭君（明倫校生、十一才）画、

というのを買われたそうで、クリスマスには、両君への御挨拶絵葉書を、私までお送り寄越しになった。

是れ等や、他地方分の貴重、証書の回付は、私の数日を寂しさから救った。思えば、日本の何処かに、又、世界のどこかに、悪い出は思い出を呼び、よろこびは歓びを伝えるであろうと、今私は、静かに、前方を凝視する。

（終り）

○此の拙文に添えて。

私は昨年末、ウ・エ・アから、民俗学の専門委員に成ってくれという御交渉を受けてしまいました。私のようなエスペラント語学の初年兵が是れをお引受けしますのは、どう考えましても所謂「出過ぎ」であるように存じたので御座いましたが、久しく民俗学に興味を持ち、他国の同学委員とも文通して居りました関係から、山賀博士や本道連盟の皆様の御力にすがりましたら、或いは私のようなものでも、幾分の働きは出来ます事かと存じまして、……お笑い下さいますな……とうとうお引受け致してしまいました。何とぞ将来は、一層御指導、御鞭撻下さいますよう、心からお願い申上げます。

埋　火（三）

柏沢治雄

埋火とはいみじくも名付けるものかな、とわれながら感心している。現われては消え、消えなんとしては又忽然として燃え上る。あまり勢はよくないが、仲々消え果ててはしまわない。LEONTODOが何百年続いてもこの調子なら原稿の品切れになる事はあるまい。原稿を書くのをさぼるつもりでこんな題名を付けたわけではない。

エス運動は埋火の如く、永遠に消える事なく、ある時は燃え上りある時はか細い煙を上げている。時期が来れば、えんえんとほのほを上げて燃え上るであろう埋火の様に根強い運動をつゞける事を形容したつもりである。

才2回全道エスペラント大会（札幌）

才1回山部大会に付て前二回にわたつてほゞその大体をお話した。この山部の大会から才2回大会までの間に色々な事があつた。ヨセフ、マヨルに付て、又中村久雄君や彼が主宰していたエス普及会の動きや、本道エス界の草分けである三田智大先生等に就ても記して置きたい事は多々あるが、その前に才2回の札幌大会を記述し、あまり大本的であつた才1回大会から本末のエス運動の軌道に乗りかかつた札幌大会、それからこの大会に於けるその後の全道エス運動の萌芽を説明し様と思ふ。

1933年昭和8年9月23日（土）24日（日）の2日にわたつて才2回北海道エスペラント大会は札幌で開催された。この年、6月20日札幌市日本植民学校で講習会開催、参加者30名講師は中村久雄君であつた、6月30日から浪越春夫君方で輪論会をしたのだから期間一週間か十日後であつた様に記憶する。その前の年十月頃から大本の信者を対象として相沢が講習会を持つた。昭和7年頃札幌のエス会は、北大、国鉄、札幌エス会で札幌エス聯盟を作つていた。だから札幌だけでも同志の数は200名位はいたと思ふが毎週の例会に出席する人は10名以内位であつた。

大会の Informizo は8月1日、7月5日、7月15日と3回発行した。会場は鉄道エス会の好意時に三崎豊市氏の骨おりで当時の鉄道集会所に決定した。大会参加者33名。

目立つた参加者（その当時の有力なエスペランチスト及び現在でも活躍しているエスペランチスト・）を若干御紹介しよう。

中村久雄（山部）。、宍戸武志（釧路エス会）、国鉄の有力メンバーの一人、後に札鉄エス会敗戦後組合の委員長等とされた様子、現在札幌におられると聞いたがお目に掛つた事はない。細井末夫（三笠山村）。原田三恵（カズマ）（帯広エス会）先生物故された。三田先生達と帯広エス会を作り HEL の結成のためにも非常な努力をされた。小樽からは藤川鉄蔵（小樽エス会）、福田仁一（小樽エス倶楽部）、福田君に就ては今後大いに記述しなければならない数多くの話題がある。長谷川等（小樽エス普及会）、この人の事はあまり記憶していない。ただ小樽エス普及会の会員として出席しておられるので名前だけ記した。小樽エス会として近藤義造、坂下清一、寿美留爾日、堂日記とも書いていた。スミルニツキー白系ロシヤ人高商教授、エス語はあまり深くはやらなかつた様だ。札幌から三崎豊市（札鉄クラブエス研究会）、札幌エス会から相沢外六人、この中に勝坂圭治君も入つている。志文から岡本義雄、苫小牧からは渡部隆志先生苫工の学生であつた菅原鉄雄君外10人の学生が、

トラックで大会当日乗り付けた。その外東京日々新聞社石井特派員というのが大会の記録にのっているがこれは警察のスパイである。敗戦後彼に会った時、昔はまことにすまない事をした。しかし君達と接触して、エス運動の美しさに心をひかれた。今度は本当にエスペラントを学んでみたいと云っていた。案外本心かも知れない。この石井（本名は別なのだが必要もないと思われるので今後もこの石井という名前にしておく）の外にもう一人の特高刑事でAというのにもやはり敗戦後出会ったが、これも石井と同じ様な事を云っていた。之等の特高刑事はエスペランチストを社会主義者（というのは現在の共産党）と同じ様に見なし、絶えずわれわれの動向を監視し、外国との通信内容を把握し様と、ある時はわれわれをおどしつけ、又ある時は親しげに話しかけ、一週間に一度位は必ずやって来たものである。とかくこの石井という刑事は、私の場合一番付合やすかったし、色々な便宜も計ってくれた。又新らしいエスペランチストの家庭訪問はしないという私との約束もよく聞いてくれた。そのかわりうつかりしてエスペランチストとの間に秘密がもれたあとでひどい目に会った事がある。（この事に付いては第24回日本エス大会の記事を書く時に発表するつもりでいる）

第1日は雨降りであった。発会式、祝電祝詞、各地報告、その後講演懇談会、中村久雄君の Danĝera vojo de neologismo、渥美樟雄氏、家庭園芸、樹木の剪蔭、相沢、エスペラントに現われたアラビア語に就て。

六時から第1回協議会

一、北海道エス連盟報告　　中村久雄

二、連盟回読誌1件　　札幌エス会提案

各地のエス会又は個人から一定の用紙にエス文又はエス語に関する記事を書き本部に送る。本部でまとめて一冊にしたら各会又は個人に回覧させる。（これはしばらくつづいた）

三、北海道エス運動史編輯1件　渡部隆志

運動史編輯委員として次の通り決定

委員長	渡部隆志
幹事	中村久雄
委員	相沢治雄
	小田島栄
	福田仁一

この提案はその後一冊にまとめられ昭和10年11月20日発行した。38頁あり　札幌、函館、エス普及会本部、苫小牧、小樽、帯広、旭川の運動小

史と佐藤徳治君の編輯した北海道エスペラント運動史年表からなっている。

四、各地ノ名士ニ本部ヨリ往復ハガキヌハ永田氏ノ演説并其ノ他ヲ送リ、其ノ意見ヲ尋ネ、其ノ結果ヲ発表スル計画ヲ小樽エス会（坂下清一氏）ヨリ提案アリタリ。　中村氏ハ聯盟本部ノ現在ノ資力状態ニテハ不可能ナリト答ヘ聯盟ニ資金ノ出来ル迄保留スル事トナセリ。尚、中村氏ハ会費ノ完全ナル払込ヲ希望ストノ言アリタリ。（以上原文のまま）

八時から大会晩餐会、この晩餐会の席上でリンゴが皆に配られたがこのリンゴの表面には Verda Stelo がくっきりと印されていた。これには参加者一同も少なからず驚いた。之は渥美氏が一ケ月も前から用意されたものであった。

第二日日曜日、第一日はひどい雨降りであったが、この日は小降となり、予定通り円山にピクニーコに行く事になった。札幌神社に参拝し中村久雄君がエスペラントで天津神詞を奏上した。12時再び会場にもどり

第2回協議会（12時半より）

一、イスライル・ライツェロヴイッチ招待ノ件

リテラトウラ・モンドの特派員イ・ラ氏を招待してほしいという事は学会からも通知があったのだが之は実現しなかった。

二、ネオロギスモニ関スル件

最初中村氏、福田氏、渡部氏ノネオロギスモ排斥ノ演説アリ。福田氏ネオロギスモ排斥ノ文文ヲ朗読ス。万場一致ニテ之ヲ第21回日本エス大会ニ提出スル事ニ決定シタリ

第21回日本エス大会ニハ中村福田両氏ガ参加ノ予定ナレバ両氏ヲネオロギスモ反対ノ決議ニ関シテ代表委員タルコトヲ依託ス。尚両氏ハ別項ノネオロギスモ使用反対決議文ヲ第21回日本エス大会ニ提出スルモノトス。

以上満場一致ニテ決定セラレタリ。

決　議　文

Rezolcio pri la Neologismoj

La Esperantistoj de Hokkaido-insulego, kunvenantoj en la 2a E.Kongreso en Sapporo unanime kondamnas la reformemon kaj troan neologismemon de tielnomataj "modernaj". Esperantistoj,

kiuj ĉiutage pli malfaciligas nian internacian lingvon. Tro ofte oni ne atentas nin Orientanojn ĉe la enkonduko de la tienomataj "internaciaj = vortoj", kiuj ne estas komprenataj en la Oriento same kiel en multaj eŭropaj malgrandaj nacioj. La kongreso aprobas la energian protestón de nia talenta poeto Julio Baghy kaj kondamnas la pli ol 600 senutilajn novajn vortojn aperintajn en la parnasa gridlibro (eldono de Literatura Mondo, Budapest). Vivu la simpla Esperanto! Vivu la tutmonda kaj interkontinenta helplingvo! Vivu la fundamenta Zamenhofa stilo!!

La 2a Kongreso de Hokkaido submetas tiun ĉi Rezolucion al la apropo de la XXIa Japana E. Kongreso Kunvenanta en Kioto kaj instrukcias la sekretarion ke li diskonigu ĝin pere de la Esp-Gazeto tra la mondo.

三、写真代ニツイテ（省　略）

四、北海道エス会聯盟本部ニツイテ

提案者　帯広　原田三郎

現在迄ノ聯盟本部（帯広）事務所（山部）、札幌事務所ヲ廃シ只一ツノ聯盟本部ヲ山部エス普及会ニ置ク事トス。而シテ聯盟事務ノ一切ヲ中村氏ニ一任ス。

その他役員若干の変更あり聯盟規定にも変更があつた。そして現在問題になつているのと同じ様な問題がこの時すでに起つていた。それは会費取扱上の不便があるため無所属の会員をどうするかといふ事であつた。そして連盟はエス会だけで組織するとの立場で個人の加入は否定され、志文の岡本義雄氏は札幌エス会に入会された。

五、赤色分子排斥ノ件

引続キ小樽福田仁一氏熱烈ナル調子ニテ赤化防止及ビ赤色エスペランチスト排斥ノ演説ヲナシタリ。吾々エスペランチストニ多大ナル損傷ヲ与ヘ、一般民衆ニエスペラントニ対スル誤解ヲ生ゼシメ、昨年ノ北

大赤化ノ如キ事件ヲ引起シ札幌及ビ全道ノエスペラント運動ヲ挫折セシメ、北大内ニ於テハエスペラントノ個人的研究スラ禁ゼラルルニ至リタルハ之皆彼等赤色分子ノナス所ナリ。吾人ハ出来得ル限リ彼等赤色エスペランチストヲ排斥セザルベカラズ。福田氏ノ演説ニヨリ万場一致シテ赤色分子排斥ヲ申合セタリ。

現在の若いエスペランチスト、又これから先のエスペランチストはこの様な決議を何と見る事であらうか。何もこの当時のエスペランチストが反動であつた訳ではない。大会でこの様な決議でもして置かなければあの当時エスペラントを安心して研究する事さえ出来なかつたろう。札幌エス会は会場をさがす事が困難になつていた。世間の人がエスペランチストをいわゆる赤色分子と見るからである。北大事件といふのは、北大の左翼分子弾圧のとばつちりを喰って、エス会は解散された事を指す。警察はエスペランチストを社会主義者並に見なしている。一方いわゆる赤色分子といふのは、あらゆる文化運動に喰い込んで宣伝しようとヤツキになっている。

エス会等には一番目を付る。エスペランチストは本来民主的な人達が多いし、ブルヂオア、資本家といふタイプの人はいないのだから考え方は赤色分子といわれている人達とあまり大した違いはなかった。批判的な現在のエスペランチストは云うであろう、何故赤色分子を排斥するかわりに、エスペラントの本質を堂々と声明し、警察の弾圧に強く抗議しなかったか、と。あの当時それが出来たら……　それが出来たら、あの太平洋ドロボー戦争に突入する事もなかったろう。

その他二三の小さな問題に付ての説明や決定がなされ第二回協議会に終った。

余興会（2時半頃）

芸工学生の合唱、中村君達の寸劇その他

第2回講演会

1 De duoleco al unueco en Bahaismo.

渡部隆志

アメリカ、フランス等で盛んに運動されつゝあつたバハイ教についてその基礎12ヶ条の信条等解説された。

2. 初期札幌ニ於ケルエス運動

相沢治雄

3 Bona ekzemplo de la vivanteco de Esperanto

中村久雄

4 Pri unutempa stuto de J.B.L.E

番田仁一

日本佛教エスペランチスト聯盟の説明

5 Andree en la poluso

相沢治雄

Per balono al la poluso といふ北極探険の話。

盛沢山の大会講演会も終り、第3回大会は小樽に決定したので招待者として番田仁一君が挨拶し、私の閉会の辞、タギージョの合唱でこの大会は終った。

La Retorikaj Tipoj de Japanaj Salutoj

—El "La Folklora Vortaro" de la Instituto de Folkloraj Esploroj. P.1—

Tradukinto K Komentariinto:
Noboru Hayakawa

"Aisacu"

Por signifi la saluton oni, en Japanio, uzadas la ĥinan vorton "Aisacu" importitan de budaismaj pasteroj, kiuj apartenante al ĉiu kvin centrecaj tempoj en Kioto kaj Kamakura sin okupadis eksterlandan komercon inter Ĥinio kaj nia lando en la mezepoko. De l'komenco en la lando, la vorto nur signifadis la interparolon.

Antaŭ la vorto ekutiliĝis, oni ĝenerale la vorton "Mono-ii" uzadis por la sama senco. Eĉ nun estas diversaj lokaj, kie oni uzadas la vorton por esprimi

la alparolatan anoncon en ial serioza okazo.

En ramparo, ni povas eĉ nun rimarki la vorton "Aisacu" ofte uzatan. Tamen, ordinare oni uzadas jenajn esprimojn: "Kotoba-o kakeru" aŭ "Koe-o kakeru".

Niaj salutoj en la frumatenoj estas preskaŭ unuigontaj al la esprimo "O-hajoo!" *, kiu orgine sencis la admiron por la diligenteco de iu frurekiĝinto.

Por la malplifrua elitiĝulo, oni kutime alparolas pri la retero de la tago. Kaj, la plipostaj rekiĝintoj estas ĉiuokaze admirataj **, kiel "Go-Ŝoo daŝi!" (Vole laboru energie!) en iu regiono.

Antaŭ aŭ post la tagmanĝo, oni kutimas saluti kiel "Nomi-maŝita-ka?" (Ĉu jam trinkis?) aŭ "O-ĉa o-agari!" (Vole trinku teon!) Koncerne al tiuj salutoj, teetrinki enhavas la sencon de tagmanĝi.

Kiam jen elresperiĝas, oni uzadas la alparolon kiel "O-ŝimai-na!" en tia simpatia senco, ke vi prave finu vian laboron sufiĉan por la tago. Kaj, kiam jen mallumetiĝas, kutime oni alparolas kiel "O-ban-de gozansu!" *** (Kian bonan nokton vi nun havas!) Tiele ankoraŭ nun vivadas la tradiciaj salutretorikaĵoj kun la diversaj enhavoj konformaj al definitaj horoj en nia kamparo.

Ordinare la vizitanto de la lando kutimas demandi la hejmeston aŭ neeston de iu, kiel "Uĉi-na?" (Ĉu hejme?) aŭ "Iraŝins-ke?" (Ĉu bonvolas esti?) Se vizitas depost respero, oni ĉiuokaze uzas la alparolon: "Joi-ban-de gozai-masu!" (Kian bonan nokton ni havas!) Tiu estas, de antaŭ, gratulo por trankviliĝi kiun vizitan protio, ke nenia malfeliĉo kaŭzos de la vizito.

La salutoj por adiaŭi estas kiel "Mata-kur-ga!"

(Refoje venos al vi !) aŭ "O-asuu !" (Al vi, morgaŭ !) ****, kiuj entenas la sencon, ke la unua adiaŭo estas nur provizora. Ankaŭ en la fremdlandoj estas la sama, ĉar ĉie estis la tabuo ne paroli al iu pri longedaŭra neintervidiĝo.

[Konsultlibro] S-ro Kunio Yanagida: "Mai-niti-no-kotoba"
(Ĉiutage Uzalaj Vortoj), 1946

Komentarioj:

* Pli kompleze, oni alparolas "O-hajoo gozaimasu." Kaj rekete aŭ laŭmode, "O-hajoo (go-) zans."

** Pri la senco de la alparolo "Go-ŝoo daŝi !", la vortaro ĉiĉe eraras. Laŭ "Mai-niti-no-kotoba" supremenciita P. 108, samokaze estas parolata en Sado Insulo, ke "Vole laboru energie!" Mi tial hipotezas, ke la alparolo "Go-ŝoo daŝi !" estis plejparte la mallongigaĵo de la supremenciita alparolo. Anstataŭ la vorto "admirataj," mi sekve povus preferi la vorton kiel "stimulataj."

*** Pli kompleze, "O-ban-de gozaimasu !" Kaj rekete aŭ laŭmode, "O-ban-de gozansu !" aŭ "O-ban zans."

**** Pli kompleze, "Deŭa izure mata !" (Antaŭ nelonge mi vidos vin refoje !) aŭ "Ŝiourei itasmasu !" (Pardonu min maldece reveniri !)

(挨拶-アイサツ- 五山の禅僧が中世に輸入した漢語で、元来は受け答えという意味しかなかった。この語が入る前には、モノイヒという語が多く使われていた。今でも何か改まった時の口上をモノイヒと称するところは諸処にある。地方では挨拶という語も使うが、普通は言葉をかける、または声をかけるといっている。早朝の物言いとしては、ほとんどオハヨウに統一されようとしているが、もとは早く起きたねと、相手の勤勉を感歎する意味であっ

た。少し遅くなると天気のことを言うが、さらに時刻が進むと、ゴショオダシ、と勤勉を礼讃する意味の物言いがある。昼の前後は、ノミマシダカ、オ茶オアがりなど、昼食は簡単だからお茶の中に算えての挨拶がある。 暖方近くなると、オシマヒナと、一日中よく働らいたから早くしまうのが当然だという思いやりの籠った言葉がある。薄暗くなるとオバンデゴザンスなどと声をかける。このように田舎では刻限に応じてその内容を変えているわけで、挨拶の言葉がまだ生きている。人を訪問する物言いはウチナ、イラシンスケと家人の在否を尋ねるのが普通である。夕方以後の訪問にはヨイバンデゴザイマスという語が使われる。これは自分の訪問は災いの種ではないと安心させるための祝い言である。別れる時の言葉はマタクルガ、オアスウなど、別れがほんの一時のものであるとの意味を籠めている。外国でもこの点は同様で、永の別れという意味の言葉を口にするのが、禁忌になっているからである。

〔参〕 柳田国男 「毎日の言葉」 昭21)

北海道こども風土記

（北海タイムス掲載）

たんぽぽつなぎ

井上二美（いのうえふみ）

そろそろ初夏とよばれるころになると、どこの農家でも、ネコの手もかりたいほど、いそがしくなります。

朝くらいうちから畑に出る、お父さん、お母さんのじゃまにならぬよう、子供たちは一日中元気よく遊ばなくてはなりません。ちょうどそのころは、ひろいひろい緑の牧場一面にタンポポが咲きだします。近くでは「いり卵」をまいたように、遠くの方は黄色い毛せんでもしいたようです。

子供たちはそれを、なるたけくきを長く、一生けんめいつみあつめます。

たくさんあつめたタンポポをもって子供たちは石狩平原をふきわたるつよい風をさけて、まるいサイロの陽あたりのよいところにむしろをしいて、花つなぎをはじめるのです。くきの長い花を五、六本しんにして、それに一本一本まきつけてつないでゆき、よいかげんのところでやめてわにしますと、黄色い美しい花わが出来上ります。

小さい姉さんたちが、"こんどはキヨちゃんのよ、"これはユキちゃんのよ" と弟や妹たちえこしらえてやっているすがたはなんともかわいらしく、のどかなふうけいをみるようです。作りすぎて一つあまった花わを、どうしようかと考えたすえ、そばにつながれている山羊の首にかけてやりますと、真白い山羊に黄色い花わが、とてもよくあつて、まるで金の首かざりをした女王さまのようです。

子供たちも、それぞれ花わを首にかけて、自分たちも女王さまになつたような気持で、ニコニコとうれしそうです。

タンポポつなぎは、みじかい夏を、ほんとうにたのしみにしている北海道の子供たちの、美しくかわいらしいあそびです。

〔訳〕 Girlando de Leontodo

F-ino Humi Inoue
Tradukita de s-ro Y. Yokoyama

Kiam, iom post iom fariĝas somero, ĉiuj terkulturistoj estas tiel okupitaj kiel ne esprimeble.

Tutan tagon ĉiuj infanoj devas ludi vigle eksterdome, por ke ne baras la manojn de siaj gepatroj, kiuj laboradas en la kampo de malluma mateno.

En tiu sezono leontodoj ekfloras sur tuta vastega verda paŝtejo. Proksime ili aspektas kvazaŭ disĵetitajn dispecigitajn rostitovaĵojn, malproksime kvazaŭ sternitan flaran tapiŝon.

Infanoj fervore ŝirpinĉas ilin kun tigoj kiel eble plej longaj. Eritante fortan venton blovantan sur Isikari-ebenaĵo, infanoj ekkomencas girlandoludon per multe da leontodoj, kiujn jam ili kolektis,

sternante maton ĉe la loko sunplena apud la sajro.

Prenante kelke da floroj kun longaj tigoj kiel centro, la infanoj ĉirkaŭligas ilin unu post alian al ĝi kaj kunligas. Nun ili faras ĝin ringforme, do fariĝas bela flava girlando. Tio estas aminda kaj kvieta vidaĵo, ke pliaĝa fratino faras girlandojn, dirante, "Nun, por Kioĉjo, tiu ĉi por Yukinjo," por plijunaj gefratoj.

Ili embarasiĝas kiel disponi pestitan girlandon tro farinte, kaj fine ili pendigis ĝin al la kolo de la kapro ĉemata apude. Flava girlando kontraŭ la blanka felo estas tute konforma, kaj ŝi estas kvazaŭ regino kun ora kolĉeno ĉirkaŭ sia kolo. Ankaŭ ĉiu infano pendigante ĝin al sia kolo ŝajnigas sin kiel se regino kaj ridetas radiante.

Girland-ludo de leontodo estas bela kaj aminda ludado por infanoj, kiuj elkore sopiras kun ĝojo mallongan someron.

〔訳〕

Girlando de Leontodo

F-ino Humiko Inoue

Tradukinto:

S-ro T Takahasi

En nia nordlando malfrue venas la sezono "frusomero" kaj tiam ĉiuj kamparanoj fariĝas tiel okupataj kiel oni bezonus eĉ helpon de katido. (Kiel ili volus prunti eĉ la manojn de kato)

Ni geknaboj devas ludi eksterdome tutan tagon por ne malhelpi niajn gepatrojn kiuj laboradas de antaŭtagiĝo en la kampo.

Ĝuste en tiu sezono floriĝas leontodoj sur tuta verda kampo. La vidaĵo estas kiel disĵetitaj

rosoroj en proksimo kaj kiel disvolvita flava tapiŝo en malproksimo.

Ni konkurante kolektas ilin kun tigoj kiel eble plej longaj. Kaj poste ni sidiĝas kun plene kolektitaj floroj sur pajlmaton elrolvitan apud sunplena flanko de altcilindra "sajro" (furaĝejo) por ŝirmi nin de ventego forte bloranta sur Isikari-ebenaĵo.

Nun ni komencu fari girlandon de leontodo. Unue ni faras medolon de kelkaj plej longaj tigoj kun floroj kaj lige volvas al ĝi aliajn tigojn unu post alia ĝis ĝi fariĝas sufiĉe longa. Kaj tiam ni konektas ĝiajn finojn kaj faras ringformon. Tiel fariĝas belaj flavaj girlandoj de leontodo.

Estas tre aminde kaj paceme vidi pli aĝajn knabinojn kiuj donas ilin al junaj gepatroj dirante : " Ci tiu estas por Kiĝo, alian mi donos al Junjo .!! Ili pripensas al kiu ili donos ceteran girlandon faritan tro multe kaj fine ĝin metas ĉirkaŭ kolon de la apuda kapro. Flava koloro de la girlando tre bone harmonias kun la blanka felo kaj ĝi aspektas ĝuste kiel bela reĝino kun ora kolĉeno.

Nun ĉiuj geknaboj portas flavajn girlandojn sur siaj koloj kaj ili estas ridetante ĝoja pro ke ili ankaŭ sentas sin kvazaŭ reĝino.

Farado de girlando de leontodo estas beleta kaj aminda ludo por geknaboj en Hokkaido kiuj atendas tiel zorge mallongan someron.

すずらんがり

飛路義知（ひろ　よし　とも）

札幌神社のお祭りが近ずいたある日のこと、雪子ちやんはお姉さんたちにつれられて、すずらんがりに出かけました。雪子ちやんはお母さんがつくって下さったおべんとうと、キヤラメルを小さなリュックサックにつめて、肩に水筒をさげて汽車にのりました。都会の子供たちにとつてこうしたピクニックは、学校の遠足や運動会と同じぐらいに楽しいものです。

雪子ちやんは、はじめのうちはめずらしがって一生けんめいにすずらんの花をさがしていましたが、一時間もたつと、すこしあきてきましたので、ひろびろとした緑のしとねのまん中に寝ころんで、青空にうかんでいる雲のうごくのをじつとながめていました。ふと気がつくと、雪子ちやんの寝ているすぐそばに一本の咲きかけたすずらんが頭をあげてこっちを見ていました。

雪子ちやんは一度ころんと、ころがって花に近ずいてとろうとしましたがとちゅうで、のばしかけた手をひっこめて、しばらく花を見つめていました。

すずらんは春のそよ風にゆれて、静かにおいでおいでをしています。雪子ちやんは、すずらんを見ているうちに、本当にこの花は名前の通り、鈴（すず）のようなかたちをしているかわいらしい花だなと思いました。

そして野原の花は、家へもつて帰つて部屋の中におくよりも、青空の下で見る方がずつと美しいなと思うようになりました。それで、さようはもう花はとらないことにしようと、きめました。

すずらんは花がかわいらしくて美しく、しかもよい香りがするので、都会の人たちには大層珍らしがられ、大切にされていますが、北海道の農村では、あまり喜ばれない植物の一つになっているのです。なぜかといいますと、すずらんは火山灰地や泥炭地など畑にならないような悪い土地に生える植物だからです。

（訳）

Mia Kolektado de Florantaj Konvaloj

S-ro Yositomo Hiro
Tradukinto: Noboru Hayakawa

En iu tago jam baldaŭ al la festo de "Sapporo Ĵinĵa", unu el la plej grandaj Sanktejoj en Hokkaidoo, Tukiôj-ino akompanate de siaj pliaĝaj fratinoj, ekiris el ŝia

domo por kolekti konvalojn. Ŝi enragoniĝis, portante sian dorsosaketon de lunĉo kaj karameloj, preparite de sia panjo, kaj botelon sur ŝultro. Por geknaboj de la urboj en nia regiono, tia pikniko estas preskaŭ tiel ĝaja kiel la urboj en nia regiono, tia pikniko estas preskaŭ tiel ĝaja kiel la ekskurso aŭ sporta kunveno.

Komence, Jukiĉjino per ĉiuj fortoj serĉadis la floretojn kun miro, tamen preskaŭ post horo, ŝi iom eklaciĝante kusiĝis meze de la kuseno rasta kaj verda, kaj do kviete ekrigardis movojn de ŝvebantaj nuboj sur la ĉielo. Hazarde ŝi ekscis, ke unu ekfloranta konvalo, levante sian kapon, sin rigardis apud ŝia kuŝado.

Jukiĉjino, unufoje ruliĝante proksimen al la floreto, volis ĝin eltiri. Tamen, ŝi duonfare retiris sian eketendantan manon, kaj do rigardis ĝin por mallonga tempo.

En printempa brizo, tiu skuiĝis la konvalo, kaj ŝajnas al ŝi alvoki per ĝia mansigno kiel ŝi venu tien. Jukiĉjino alrigardante pensis la floreton bela pro ĝia simileco al titiletaro, kiel ĝia nomo "Suzu (tintiletaro)—ran (orkideo)" montris al si.

Kaj plie, ŝi ekkliniĝis pensi, ke la floroj de la kampoj estas generale pli belaj sub la blua ĉielo ol tiuj domen alportitaj kaj ĉambre rigardataj. Do ŝi decidis, ke ne plu si eltiru la floron.

La konvalo estas mirinde rigardata kaj prizorgata per la urbanoj, kaŭzite de ĝia ĉarma beleco kaj bona parfumo. Sed tamen, en kamparaj vilaĝoj de Hokkaido, ĝi estas unu el la neĝojeblaj vegetaĵoj, ĉar ĝi kreskas sur la malbona tero neuzebla por la kampo, kiel la vulkancindra tero kaj torfo.

(Fino)

郵便スタンプの国際化について

由仁　新田為男

私がかつて、国際文通に非常な熱を入れていた昭和12－13年（1937－1938）当時，私の文通相手は，老若男女合せて45ヶ国の60人ばかりがいました。そのうちでも，一番美人で，エスペラントも母国語と同じように家庭でも使い文字も大へん上手だったフランスの Renée Bergereau 夫人とは，特に親しく文通していました。フランス語やエスペラントの書籍や雑誌がほしいときには，何時も，Renée 夫人宛に送金して，送ってもらっていました。

たまたま，国際返信切手を送ったところ，あちらの郵便局で，すったもんだのいきさつがあって，やっとのこと，説明にならない説明で，どうにか受付けてもらった様子が，Renée 夫人からの手紙に書いてありました。

その返信切手におされている当地の郵便局の日附は 13，6，25（昭和13年6月25日）で，あちら読みにすると，1925年6月13日となり（昭和13年は1938年に当る）もう13年も前の古いものは受付けるわけにいかない，というのがあちらの郵便局員の言い分らしい。

そのいきさつについての Renée 夫人からの手紙の一部を原文のまゝ参考までに次にかかげます。

私は早速，次のような解説を，長々と，日本とヨーロッパの国々とのちがっているところなどを書いた手紙と一緒に送りました。

Klarigo de dato stampita sur rpk.

(Japane)　　(Eŭrope)

13，6，25 ═══ 25，6，1938

tago

monato

Jaro

Uzata nur en Japanujo,
nomo de erao es. Ŝoŭa.

このこと以来，国際返信切手を送る時は，何時も，必ず上記のような解説附箋をつけているので，その時のような間違いも起らないで，すんでおります。せめて，国際的に使用する場合だけでも，西暦の日附にすることによって，このような馬鹿〳〵しい間違いも起らなくてすむだろうに，と常に考え

させられます。

R夫人からの手紙の一部：

------ ke oni pagu la 2 respondokuponojn, mi iris unue al la poŝtoficejo, tie oni avertis min ke ili ne plu estis valoraj, mi protestis dirante ke mi ĵus ilin riceris, oni montris kiel pruvon, la stampon kaj efektive mi devis klarigi, ke ĉiuj viaj stampoj havas la nombron 13. t.e. sur la stampoj de l' respondkuponoj estis legebla 13.6.25. do mi legas inverse 25 de Junio 38, ĉu ne? Sed la poŝtoficistoj legis 13 de Junio 1925! Laŭ miaj konvinkantaj paroloj, li duonvole pagis. Jam mi ne plu pensis al tio, mi forvojaĝis dum 3 tagoj, sed rehejmiĝinte mia bopatrino alportis al mi la du jamajn respondkuponojn, kiujn ŝi deris repagi al la poŝtoficisto. Malkontenta kaj eĉ iomete kolerema mi iris al la poŝtoficejo, sed antaŭe mi zorgis kunporti vian unuan karton ricevintan la unuajn taĝojn de Januaro. kies stampo estis 12.12.6 kaj du el viaj korertoj kies stampoj estis tre videblaj, ree oni pagis al mi la ŝulditan sumon, sed oni konservis la karton kaj unu korerton por sendi kiel atestigilojn al la direktoro, mi preskaŭ ridis, ĉar la sumo estis malgranda, sed granda aŭ ne, estis necesa agi tiele. Ni ne plu pensas al la poŝtoficistoj, sed mi petas kiel, kiamaniere vi nombras la jarojn? ĉar 13 = 1938? kaj viaj jaroj estas tamen 365 1/2 tagoj? kaj 12 monatojn? mi estas tre dankema se vi klarigos tion al mi -------

ぐちーやらーがんもうーやら

山本昭二郎

私は個人攻撃はきらいである。きらいであるということはしないということではないが、でも私自身個人攻撃をされることは意に介しない。何故なら、私は自分が不完全極まる人間であり、見かけの品行はよく見えても、正味はごくつまらぬ、エゴイスチックな男であり、むしろ人々の非難、軽蔑、憎悪に相応する方だと思つている。

私も人を瞬間的に軽蔑し、憎むことはある。けれど、それはせつな的なものであり、やがては全く忘れてしまう。しかしある人に対して、しばしば、憎悪や、軽蔑がくりかえされる時は、その人を見る毎に、反射的に理由なく憎悪や、軽蔑をかんずる様になる。人間には多くこういう欠点が共通している様に思われる。

エスペランチストの中には実にいろいろなタイプの人間がいる。むしろ変つたタイプの人間が多いかも知れない。その道の権威として世界にあまねく知られている者もあり、人間として魅力ある人もあり、又一方、えたいの知れぬ野業や、信念の人もあり、無慾恬淡な好人物もある。ともかく種々雑多な人間がある。

人間が好悪の感情をもち、それを表現するのは自由である。ただ、人間達は、自らの人間社会の円滑な運営のために「してはならないこと」を約束した。たとえば殺人、りやくだつ、強姦、放火、など。人間が意志を表現する自由があつても「してはならないこと」の約束を先づ守った上での事である。してみれば、あいつを殺したいと思つてそれを実行することは人間社会のおきて—人間達のきめた約束—に反することである。しかし一般的には、言葉による表現には、行為による表現についてほど罰が重くない。むしろ全くないかも知れぬ。

AがBの悪口をいつても人間社会はあまり罰しない。(とりわけ日本国にあつては)もしその悪口が周囲の者に思いあたるていのものであつたり、たまたま非難されたBが周囲からうとまれている場合、人々は、その一方的非難、当人を前にしていないでなされる非難に対して別にどうともえわぬ。むしろそれに迎合することが多いのであるまいか。

評論家として有名な某氏がEsperantoのことを悪しく言つたそうである。その某氏の発言は日本ではなかなか影響力があり、某氏の部下や弟子がこ

の国の言論界に無数にいて、しかも中堅的な活躍分子であったりするので、Esp. 運動のために某氏の発言は一般的な観点からすればなかなかのマイナスであった。

某氏の弟子たちが、その某氏の〝信念〟を金科玉条としているかもしれぬ時は尚更である。私は思う。某氏はEsperantoを知らず、たまたま一人、二人の Esperantisto を知って、Esp. も Esperantisto も一緒くたにしてしまったのではないかと。

私の知る限りでは某氏は Esperanto を学んだことは勿論ないし、その思想についていささかも造詣がない様に思われる。某氏はきっとたまたま遭遇した Esp-tisto から何か同氏のかんにさわる様な言動を受けたに相違ない。そして以来同氏は、Esperanto にも感情的になったのであらう。

著名な某氏にしてこの位であるから、一般の市民達の中にも、某氏の様に、Esperanto に対して、感情的になる人もなかなか多いのではないか。彼等には共通した誤りがある。エスペランチスト＝エスペラントという式である。これは 共産党員＝共産主義 という考へ方とそっくり同じである。Esperanto は支持するが、Esperantisto からは evitiｉ(避ける)する、というならまだ話がわかるが、しかしこの場合、個々の Esperant-isto に接触してそのいづれにも好もしくない氣持を感じた——上でなければ、そういう言明はつしむべきであらう。〝私はエスペランチストに失望した〟と言明するのは自由であるが、果して彼は、エスペランチストと名のる人達のピンからキリまでと接触した上での見解であろうか。たいがいは、4～5人の身辺のエスペランチストに接し、そういう人達の雰囲気から、みんなこんなものなんだろう、とりって結論するのが普通ではあるまいか。これはあまりにも〝日本的〟である。私のこういう説き方からすれば、かの高名な評論家〝某〟氏も極めて〝日本的〟な人物である。

日本にもエスペランチストの数は多い。しかし、その思想、生活、語学力、経験、いろいろな教養、そして性狀、などによって、人物として、主義者として、又人間として、いろいろと対者に感受されるわけである。

日本人は100％のエスペランチストになるには、今日の段階では迚も無理である。むしろ西欧のものとりってよいその文法構造に充分抵抗をかんぜぬ様になるためには、なお何百年もかゝるだろう — 日本語が日本的である限りは —

私達がエスペラントの理想や、現実を人々に説く時、私達エスペランチス

ト達の遭遇している種々の大きな困難を率直に語らなければならない。そして、私達がかく辛苦しつゝも尚エスペラントの理想に献身する私達のほこりと抱負をそれとなく知ってもらうべきであらう。私達はあまりにも観念のエスペランチストでありすぎる。なかにはそのロマンチックの故に、エスペラントをしている者もあるであらう。動機はともあれ、純粋にエスペラントの発祥と発展の意義を考える時、私達は、私達が主義者として立派であるために、もつと行動的でなければならないことに氣づく。そして「急がなければ」何かしらとりかえしのつかぬことがおこりそうな氣がする。何を急ぐのか、――「何かしらを」。

Esperanto学習者の手助けに

（札　幌）

アリマ・ヨシハル

Esperanto わ、自国語を除けば、世界中で一番やさしいコトバですよとか、入学試験勉強をするつもりで毎日ミッチリやれば3カ月で Esperanto の読み書き話ができるようになるといいながら Esperanto の宣伝をすると、大体の人は、では自分も Esperanto を始めてみようということになる。

だが実際始めてみると、宣伝ほどにはやさしくないという感じをうけ、あじけつくようだ。現にわたしもそうした感じを持つた一人だから確かだ。

もつとも Esperanto わ他の英語、ドイツ語、フランス語などに比べると、確かにずつとやさしいコトバである。しかし何と言つてもニッポン語とわ語系のちがつた外国語のことだから、ニッポン語をおぼえるようにそう簡単にはいかない。

Esperanto を習いはじめて、まゴぶつつかるのがコトバの語尾変化だが－o、－a、－e の中のどれが副詞、名詞、形容詞のそれぞれの語尾なのか、動詞語尾の－as，－is、－os でわどれが未来で、どれが現在動詞かということは初めの間は仲々おぼえられない。

そこで、いままでにわたしが Esperanto の手ほどきをするときに使つてきた品詞語尾や単語の簡単な覚え方を以下すこし述べようと思う。もしもこれが Esperanto の手ほどきにいくらかでも参考になればどしどし利

用して Esperanto を広めていただきたい。なお品詞語尾の覚え方はエスペラント四週間に出ているものをそのまま参考にさせてもらった。

○ Esperanto を初めておぼえる人でも名詞の語尾が－oであることは知っているので名詞語尾をおぼえることはそう苦労しない。
エスペラント四週間に書いてあるように「mono（物）やkoto（事）を示すコトバだから o で終るとおぼえる」のはいい覚え方である。
○ 形容詞の語尾－aわ「migotona、rippanaのaだ」とおぼえる。
○ 副詞の－eわ「ŭaratte，kurŝindeのeだ」とおぼえる。
○ 不定法の－iわ「on'okuri soorooのiだ」とおぼえる。
○ －as，－is －osの現在，過去，未来の動詞語尾をおぼえるに先き立ち まず考えておくことわ、「人間わ現在に生きるために過去をかえりみて、未来えすすまなければならないから、現在の次わ過去、その次が未来だと現在、過去、未来という順序をハッキリ頭に入れる。次にas，is，osのaioの順はアルファベートでaが一番さきでiが次ぎ、oが最後になっているその順をおぼえておき、現在，過去，未来の順とas，is，osの順とを結びつけて、asが現在，isが過去，osが未来とおぼえる。 また語尾わ kikimasu，okikisita，kikimosoo とおぼえるのも一つの方法だ。
○仮定法の語尾－usわ本当のことをいうのでなくusoのことをいうのだから us とおぼえる。
○ 命令法の語尾－uわmeizu（命ず）のuであるとおぼえる。
エスペラント四週間には Esperanto からうける語尾の感じわ
ŭaga ĉiisana otooto ŭa buĝide kuraŝi orimas(u)
というニッポン語からうける感じと同じようなものとおもえばよいと書いてあるが参考になるとおもう。

次にわ接頭字と接尾字の一部の覚え方について書いてみよう。
○ 接頭字の mal－ わ正反対、マル反対を表わすからmalだとおぼえる。
○ ge－ わ genan，geĵo（下男，下女）のge とおぼえる。
○ bo－ わ結婚してうれしさにboッとなる間柄になるのだからboだとおぼえる。
○ 接尾字の女性を示す－in－わ男性わ陽，女性わ陰のin だとおぼえる。
○ 度合の強大を示す－eg－と弱小を示す－et－をおぼえるにわ、ゴトゴト、ドンドンとニゴル音は大きく、コトコト，トントンとニゴらない音は小さ

り感じを与えることから eg、et を比較して、eg とニゴル方わ大きいものを示し、et とニゴらない方は小さいものを示す接尾字だとおぼえる。

○ 道具を示す -il- わ、道具わ何かするときにイルものだから il とおぼえる。

○ -ig-（ーにする）と -iĝ-（ーになる）わ、「意地になる」とは言うが「意地にする」とわ言わないから iĝi の方が「になる」のだとおぼえる。

○ 分数名詞を示す -on- と倍数を示す -obl- わ次のようにおぼえる。on わ英語で上ということであること、分数わ数字の上に数字がある形を連想し、また obl オブル倍という英語の doble ダブルと似ていることから連想しておぼえる。

○ -aĉ- わアマツチヨ（amaĉo）の aĉ だとおぼえる。

○ 分詞接尾字の ant, int, ont, at, it, ot わ動詞語尾の as, is, os にならって a のつく ant, at わ現在のこと, i のつく int; it わ過去のこと, o のつく ont, ot わ未来のことを示すとおぼえる。

○ -ĉj- と -nj- わどちらが女子のか男子のか初めは区別がつきにくいが、女子は女人（njonin）だから nj の方が女子につける愛呼称だとおぼえる。

以上のような覚え方を話しながら Esperanto の文法を説明して行くと、これわ案外おもしろい、やさしいコトバだという安心感をもつて勉強がすすむことうけあい。

どこのコトバでもそうだが外国語となると何よりもまず苦になるのが単語をおぼえなければならないこと。これで大低の人わ単語わイクツ位いおぼえればいいのかと、シリゴミする。しかし外国語を習う以上わ単語暗記わさけられないことで、単語を知らなければその外国語をマスターすることわ出来ないのだから、単語暗記わぜひやらなければならないことを説明して、ただ Esperanto わ他の外国語に比べておぼえやすいことを次のような例をあげて説明する。

○ Esperanto にわニッポン語から連想しておぼえられる単語も少なくない。手わ mano 手（魔の手）とおぼえる。ニワトリわココ、ココとなくから koko とおぼえ, 心わココロ → コーロで koro とおぼえる。

○ ギモン詞の ĉu わ文の初めに ĉotto つけるから ĉu であるとおぼ

える。
○ 近接を示す ĉi わ ĉikai意味を表わすから ĉi とおぼえる。
○ ĉapo わシメツポでフチナシ帽，ĉapelo わ ĉapo に el のフチがあるので中折帽のようなフチつき帽とおぼえる。
○ 球の sfero わ，球わ丸ッこくスフエツとしているからスフエーロ、苦しみの sufero わ スウフエーロと発音するので sfero よりわ発音しにくく苦痛を感じるから sufero が苦しみで sfero が球だとおぼえる。
○ コーモリわタ方 vespero に出て来る動物だから vesperto とおぼえる。

以上のような風におもしろおかしく説明すると、初めおじけついていた人も、でわーっ Esperanto を本腰でやってみようという気になる。
ところで、いまだにわたしがうっかりまちがうコトバに、近いと遠い、左と右、閉めると開けるがあるが、これらは次のようにおぼえればいい。

○ proksima と malproksima と比べると malproksima の方が字数が多く字面が長いから遠いとおぼえる。
○ dekstra と maldekstra わ、maldekstra-dekstra, maldekstra-dekstra（ヒダリミギ，ヒダリミギ）とリズミカルに唱えてみて、maldekstra が左，dekstra が右だとおぼえる。
○ マドやドアーわ閉めるより開ける方が苦労する。fermi と malfermi を比べると malfermi の方が字数が多いので読み書きに苦労する。だから両方を関連させて、malfermi が開けるだとおぼえる。

Esperanto を教えてよくたづねられることわ、どれ程の単語をおぼえればいいのかということである。それに対してわたしわ次のように答えている。
Esperanto わ品詞語尾を変化させたり，コトバの頭やおしりに添えコトバをしたり、コトバとコトバを組合せたりして新らしいコトバを造り出すことが出きるので、他の外国語に比べるとおぼえる単語の数わグット少くてすみます。例えば，san（健康）という語根を品詞語尾の変化をさせれば、たった1つから9つの単語が生れ出て、mal という接頭字を添えれば病気に関する新しい9つの単語が出来ます。こうして san たった1つの語根に接頭字、接尾字を添え、それぞれ語尾を変化させれば、Fundament-

o de Esperanto にあげてある sano に関するコトバがよス語ですから 820 以上の単語をおぼえたことになります。

Esperanto でわ語根を 300 も知っておればただちに1万語以上を立ちどころに会得したことになります。もっとも、父という patr- のような語根わ patras という動詞にわならないので、品詞の7通りの変化わどの語根にも適用されるわけにわいかないことになります。しかし適用できないというのわ Esperanto 以外の国語から見た場合であって、Esperanto界でわ全単語に適用できるのです。

ここに scienco（科学）というコトバがあります、Esperanto界でわこの scienco わ規則どおり7通りに語尾変化ができます。ニッポン語でわむかしわ「科学する」という科学を動詞化したコトバがなかったので sciencas わ説明出来なかったのですが、いまわ scienco の9つの変化を全部訳すことが出来るわけです。

また、松崎克巳著「エスペラントやさしい読み物」中の「全智博士」にわ博士 doktoro を動詞化した doktoris というコトバがあり「博士った」と訳してあります。博士ったでわその意味がしっくりしませんが、使っているうちに一定の意味をなして来るでしょう。

このようにEsperanto 界でわどの語根でも9通りの語尾変化が出来ますが、それに対する適当な訳語がニッポン語その他の国語にわ不足しているわけです。結局 Esperanto わ各国語の将来の進み方を指示しているようなものです。将来ニッポン語にも父を動詞化したコトバが生れ出たときに Esperanto の patras が生きて来るわけです。

これでわたしの話をおわりますが、皆さまが Esperanto を教えるとき、学ぶときの手助けになれば幸です。

Revuo Orientaにより北海道エス界(2)

坂下清一

139 Raporto pri la propaganda vojaĝo

北海道及東北地方十三市への宣伝旅行

Nia Instituto organizis propagandan karavanon por verdigi la nordan parton de nia lando. La karavano konsistis el kvin samideanoj. Kaj ili ekveturis norden la 26an de majo kaj en 13 grandegaj urboj en la distrikto faris propagandajn porolatojn kaj ĉie ankaŭ paroladis pri Esperanto al multegaj lernantoj de tieaj mezgrandaj lernejoj. La nombro de l' auskultintoj de iliaj parolados atingis sume 19220. Kiel ili laboradis kaj kian sukceson ili havis, vi povas vidi en la sekvanta raportaro, kiun ili letere raportis al la instituto.

140 La 31an tagon

Je 11. ni trame iris al Hakodate urbo. Je 12.30 en Hakodate-liceo parolis s-ro Okamoto antaŭ 700 lernantoj. Je 14. en Hakodate-pedagogia lernejo s-ro Tojokaŭa parolis antaŭ 500 lernantoj. Je 17. tieaj samideanoj okazigis konvenigan festenon por ni en Gotoken.

Je 19.20 - 21.30 propaganda parolado por urbanoj en Urba Publika Salono. (Sroj Saito, Takakuŭa, kaj ni ĉiuj paroladis antaŭ 130 p.)

Je 22.15 forlasis Hakodate-Statidomon, adiaŭinte samideanojn.

141 La 1an de Junio 141.

Je 6.33 elvagoniĝis en Otaru-urbego. - vizitis la redaktejon de Otaru Ŝinpun. sub kies helpoj ni povis havi sukcesojn en Hokkaido.

Je 13.20 Sro Okamoto parolis antaŭ 120 lern. de Otaru Marproduktaĵa-lernejo. Sro Nakamura parolis antaŭ 400 lern. de Ĵissen Knabina-

liceo. S^ro Tojokaŭa veturis al Sapporo por preparo. Je 15, S^ro Iŝiguro parolis antaŭ 200 lern. de Otaru-urba-knabina-liceo. S^ro Okamoto parolis antaŭ 250 lern. de Midorigaoka knabina liceo. S^ro Nakamura parolis antaŭ 900 lern. de Otaru komerca liceo. Je 20. komideanoj de Otaru paroladis.

La 2^an Tagon

Je 8.40 en vagoniĝis ĉe Otaru-stacidomo kaj veturis al Sapporo por tie fari paroladojn. Je 11. S^ro Iŝiguro parolis antaŭ 950 lern. de Sapporo knabina-liceo en Sapporo. Je 16.30 ni ĉiuj vagone revenis al Otaru. Je 19.10-22 paroladego por urbanoj en Otaru-Kongregacia Preĝejo. (S^ro Iŭatare, Fukuta kaj ni kvin, parolis antaŭ 180 p.)

La 3^an tagon

Je 8.40 ni forlasis la urbon Otaru kaj veturis al Sapporo. Je 10. alvenis al Sapporo. Je 13.30 s^roj Okamoto kaj Nakamura parolis antaŭ 50 lern. de Ĝoŝogaŭara-agronomia-liceo, kiuj gastiĝis en nia hotelo. Je 17. konvenigan festenon por ni okaziĝis tieaj samideanoj en Jûgotei. Je 19.20 parolado por urbanoj en la fama salonego Tokeidai (s^ro Takamacu kaj ni ĉiuj parolis antaŭ 400 p.)

La 4^an tagon

141. Je 5.30 S^ro Sasaki reveturis al Tokio, ĉar li havis multajn urĝajn aferojn en Tokio. Por ni estis granda bedaŭro, sed ni ne povas restigi lin. Je 10. vizitis prefektejon de Hokkaido.

Je 13, S^ro Tojokaŭa parolis antaŭ 80 p. de Sapporo-memregada-kursejo kaj Sappor-indust-

nia-kursejo. Sro Iŝiguro parolis 850 lern. de Sapporo-urba-knabina-liceo.
Je 14. Sro Tojokaŭa parolis antaŭ 900 lern. de Sapporo-pedagogia-lernejo.
Je 19 envagoniĝis por veturi norden kaj adiaŭis samideanojn tieajn kaj la mastron de Sapporodo-librejo, kiu bonkore helpis nian movadon kaj disdoniĝis 200 afiŝegojn kaj 5,000 afiŝetojn, kiuj anoncas pri nia propaganda parolado. Sro Nakamura restis en Sapporo ĝis la 7a tago por interpreti la paroladon de Sro Rosese, angla samideano, kiu parolis antaŭ 120 studentoj de Hokkaido Imperia Universitato je la 15.30 en la 6a tago (sukcesplene)
Je 23.27 elvagoniĝis en Asahigaŭa.

La 5an tagon

Dank' al la memoriga festotago de milite-mortintoj en tiu ĉi urbo ĉiuj atentoj de l' urbanoj estis tiritaj al tiu festo, sed ni klopadis algluinte afisegojn. Je 19.30-21.30 parolado por urbanoj en la salonego de l' urboficejo. (Sro Fujiŭara, Hoŝi kaj ni, tri, parolis antaŭ 70 p.)
Je 11. Sro Nakamura, kiu restis en Sapporo, parolis antaŭ 900 lern. de Sapporo-unua-liceo kaj je 12 li ankaŭ parolis antaŭ 700 lern. de Sapporo-dua-liceo.

La 6an tagon

Je 9. Sro Iŝiguro parolis antaŭ 650 lern. de Asahigaŭa knabina-liceo. Je 10. Sro Okamoto parolis antaŭ 800 lern. de Asahigaŭa-liceo. Je 11 Sro Tojokaŭa parolis antaŭ 800 lern. de Hokuto-knabina-liceo. Je 13.40 envagoniĝis kaj alveniis Muronan je 21.35

(以下次号)

北海道エスペラント連盟会員名簿

N-ro 11　ニツヅク　（N-ro 11　14名）

高木貞夫	札幌市南13，西13 吉村方
熊近庄次郎	〃 北16．東1の9
桐生育眠	〃 北12．西14
滝一郎	美唄市南美唄町三井下4条4丁目右1号
木津義雄	旭川市一条通7丁目左4号
西忠雄	札幌市北12．西2 北大工学部建築工学部教授
吉田栄	函館市弁天町43
鈴木政次	小樽市稲穂町東7の25
山賀勇	〃 花園町東3の11
早川昇	〃 緑町2の2
高橋達治	〃 桜町30 7
中沢天眠	〃 花園町東4の22
池渕与三吉	〃 緑町5の28
江口吉吉	〃 真沢町4の22
山本昭二郎	〃 清水町34
土田虎幸	〃 〃 〃
前田幸一	〃 花園町西2の17
斉藤[illegible]	〃 〃 東2の12
鷲田丸ちゑ子	〃 朝里新光町
長岡弘	〃 重徳町25 井華紘業内
河野チエ子	〃 汐見台町9
渡辺正	岩見沢市2条東2丁目
西里[illegible]彦	札幌市南16．西5
小川信昭	〃 北10．西3．副江幸方
菅原鉄雄	勇払郡上厚真局区内上周文
工藤尚	東京都北多摩郡国立町東区95
飯訪昌久	札幌市 南3．西21
井端秀雄	夕張郡栗山町立南学田小学校
新田為男	夕張郡由仁町字三川
大村誠	〃 〃 〃

村上　隆	夕張郡由仁町字三川
外山雅子	〃　〃　字由仁
荒谷昭典	〃　〃　字川端
成松富子	〃　〃　字熊本
伊藤秀隆	〃　〃　字吉山
星田　淳	支笏湖局区内千歳オー発電所
田辺　至	雨竜郡深川町東町深川東高校寮内
藤原信吉	函館市港町鉄道敷地鉄道公舎 185号の2
藤井訣司	岩見沢市4条西15丁目
高屋宣子	札幌市北20,西3,
早坂　基	〃　南2,西25 郵政局建築部内
渡辺由美	函館市宮前町24,西別院出張所内

お願いと報告

機関誌レオントードを年四回発行するために、会員の皆様に編集責任者より次のことをお願致します。

オーに原稿のこと。皆様の原稿がなくては発行したくとも発行出きない次第です。毎度同じ人にお願して誠に恐縮しております。皆さん方の機関誌ですからエスペラントに関係があれば和文エス文何れでもどしどし御投稿下さい。締切日は特に設けません。何を書いたらよいかとよく言はれるのですが"エスペラントを学び初めた動機と私の先生""エスペラントに関して一番印象深いこと"の二題は如何でせう。何時、どこで、誰に、どうして初めた如何でも結構です。当時の状勢なども詳しく書いて頂けば尚結構です。古い人、新しい人たちのこの特集が出せたらと思ひます。

オ二に費用のこと

（支出予定）		（収入予定）	
印刷代	3000×4＝12,000	会費	70人 200.- 14,500
送料	800×4＝3,200	寄附	1,500
振替料	300		
計	15,500	計	15,500

目下会員56名ですから14名の御協力を必要とします。入会御申込の方でまだ御送金のない方は至急御送金下さい。

6月17日現在の会計を御報告致します。

（収　入）			（支　出）	
会費一年分	200円41人	8200	#11号印刷代	3,000
〃 半年分	100円15人	1500	〃 郵送料	864
誌代10部		400	振替料	195
寄附（岡本,吉田,菅原）		500	計	4509
立替（坂下,アリマ）		864		
利息		16		
計		11,480	残高 11,480−4,059＝7,421.−	

以上の次なわけで原稿さへ集まれば機関誌は出せますから何卒原稿御投稿に一段の御協力願います。

坂下記

原稿募集

★ LEONTODO N-ro 13 の原稿をお寄せ下さい。
★ 枚数、内容 随意（日本文の時は原稿用紙）
★ 原稿締切 30.8.31
★ 原稿送付先 北海道ESP.連盟
又はS-roアリマヨシハルへ（札幌北24西9）

正誤

本文中17,18,19,20pはそれぞれ訂正ねがいます。（19,20,17,18とあるはあやまり。

LEONTODO N-ro 12

LA ORGANA GAZETO DE H.E.L

発行日　1955年7月1日
編集
発行人　北海道エスペラント連盟
札幌市北1条東9丁目　坂下方
振替　小樽5240番

会費　年額200円